

## ジュリアン・グリーン

### ——『モイラ』の模様——

長戸路 信 行

#### 1.

ジュリアン・グリーン (Julien Green, 1900~?) は小説『モイラ』(Moïra, Plon 社版, 1950 年) の序文に, モイラ (Moïra) がアイルランド語でマリーを指す名前であること, またギリシア語では運命を指す語の一つであることを述べ, 自分はわざわざそうした (運命と名づけた) わけではないが, この偶然の一致に不満を言うつもりはないと言っている。そして「私がここに登場させたプロテスタントの人びとは, 私のプロテスタンティズムに対する意見を示すものでは決してない。ただかつて私の見知ったかれらを, そのまま描きたかっただけだ。かれらのすばらしさと, それにもかかわらずかれらの持つ弱さとを」と記している。

同じ 1950 年 6 月 10 日のフィガロ・リテレールでは, この小説の構想をどこから得たかについてこう語っている。「1948 年の夏の終りごろ, 明け方に, 私は自分の寝台から数歩のところに何かがいるという感じがして目がさめた。そうとしか言いようがない。誰かが私の部屋にいた。私は目をひらいたが何も見えなかった。しかし私の想像力が示してくれたのは, 立ったままじっと私の方に目を注いでいる一人の若者であった。この一種の内的な幻影があまりにも鮮やかなので, 私は肉眼で何かを見分けているよ

うな気がした。自分の前にいるこの人物の物語を書きたいと思い、数時間後に私は小説を書き始めた。いまだかつて自分のうちにこれほど書きたいという強い欲望を持ったことはなかった。端から端まで、その物語は細部にいたるまで私には見えた。一度にすべてを見、すべてを聞いたように思った。」

たしかに 1948 年 8 月 23 日のかれの『日記』<sup>1)</sup>には、「今朝、明け方、私は目をさまし、私は自分の本を始めから終りまで見た」<sup>2)</sup>。かれは私を眠りから引き出した。私の前、うすくらがりの中に、じっとしているこの人物。……」と書かれている。同じ 10 月 7 日にも、8 月 23 日の朝のことを回想して、「私の本が端から端まで、その登場人物たちも、筋も、情景も与えられたような印象をうけた。ただの一瞥で、あたかも一種の内的な啓示をうけたかのように私の本を見た。そのときジョゼフ・デイが私に示されたのだ。……」と書いている。

しかしこの小説のテーマがジュリアン・グリーンの心をとらえたのは 1948 年がはじめてではない。1946 年 1 月 13 日の『日記』に、おそらく散歩から戻ってすぐ書いたものだろうが、ついさっき小脇にミサの本をかかえた赤毛の青年とすれちがったことを記している。ただそれだけのことなのに、ジュリアン・グリーンにはその青年が印象に残ったとみえ、『赤毛の物語』と呼ぶ小説を書いてみたい、「赤毛は孤独だ」と書きとめている。そして事実かれは赤毛の物語を書くのである。1948 年 8 月 25 日の『日記』には、「今日はたくさん書いた。これは赤毛の物語となるだろう」という一行がみえる。このときかれは『モイラ』の初稿<sup>3)</sup>を 1 人称で書き進めていて、そのなかで主人公（決定稿と同じジョゼフ・デイという名の）が「私は赤毛だ。赤毛はひとりぼっちだ」と言っている。ジュリアン・グリーンは「赤毛の」青年とすれちがったとのみ記しているが、その青年の際立った容貌にもまた強い印象を受けたのではないかと思われる。この小説の作者ジュリアン・グリーンの自伝（たとえば *Terre lointaine*）を

読むと、かれが美貌の青年、きびしく烈しい美しさを持った青年に強く惹かれ、ただ一度の印象をいつまでも抱きつづける例がしばしば出てくるからである。この小説の主人公ジョゼフ・デイは髪の色ばかりでなく、その肌の白さと美貌によって人の目を驚かせる。

『モイラ』のテーマは、しかしながら、さらにさかのぼる。さきに引用した1948年10月7日の『日記』によると、ジュリアン・グリーンは出版のために古い日記をコピーしていて、1944年10月10日の項に「ある女と結婚しながら、それが救いの妨げになるといって絞め殺す狂信的な夫の話を書いてみたい、多分フランスに帰ってからになるだろうが<sup>4)</sup>」とあるのを発見して仰天する。かれの言うとおりに、これこそ小説家の心の不思議である。とうに忘れてしまったことが心のどこかの隅で変形し、成熟してゆく。このことは1972年版『モイラ』の序文でジュリアン・グリーン自身が感慨をこめて語っている。しかし小説家の心の不思議はさらに深いところに根ざしている。かれが24才のとき（1924年）に書いた『フランスのカトリック信者への訴え<sup>5)</sup>』（原題『フランスのカトリック信者に対するパンフレット』）の中には激しい告発の言葉が立て続けに出てくる。「天上のものごとについて冷やかに話されるのを聞くのは、おぞましい限りだ。それはただただ熱と激しさにほかならないというのに。」「本当の宣教は狂気に属する。聖職者の語り方は、さかしげ、かつ理づめなのだ。……」この聖職者をデーヴィドと改めれば、これはそのままジョゼフ・デイの言葉だと言ってもよい。

## 2.

『モイラ』の草稿とみなされるものが7篇残されている。最初のものは1948年5月28日の日付になっている。第7稿を除いては、いずれも1ないし2ページの断片で、第1稿から第5稿までは3人称で、第6稿と第7

稿は1人称で書かれている。第5稿までに登場するのは、決定稿のミセス・デアの原型となる人物と、その養女のセリナという娘で、これがモイラの原型になっていると思われる。このセリナという名は決定稿ではモイラの友人として出てくるが、ただ名前が出てくるだけで、主要な役割は果たしていない。

第6、第7稿は1人称で書かれており、主人公の青年が苦しい眠りからめざめる場面から始められている。かれはすでにモイラを殺害している。つまり決定稿『モイラ』の最終ページのあとに続くはずの場面から始まるわけである。

第7稿はプレイヤード版で16ページにわたっており、主人公の思い出として語られるミセス・デアとの最初の出会いの情景などは決定稿にそっくり採り入れられている。ただ決定稿と異なっていることは、主人公ジョゼフ・デイの故郷の小さな町についてかなりくわしい描写のあることである。決定稿ではこれが簡略になっているが、ジュリアン・グリーンがこの故郷の町を大学のある町と対比させようと意図していたことが分る。

決定稿は1948年9月10日から始められるが、第7稿との最大の相違点は、これが3人称の語り口になっていることである。ジュリアン・グリーンが第7稿を放棄し、決定稿へと移る前日の9月9日の『日記』にはこう記されている。「私の本についてよく考えてみた。私が物語を語る役目を負わせたこの人物（ジョゼフ）は、本が書けるような人物ではない。それができるようだったら、かれは私が8月23日の明け方に見たような人間ではなかったろう。私の目にうつった、あの少し粗野で狂信的な、宗教と欲望とに同時にとりつかれた青年ではなかったろう。……」そして「あしたやりなおそう、こんどは3人称で」と言明している。

しかし、出来上がった『モイラ』は普通の意味での3人称の小説とは大分趣を異にする。ここで「ジョゼフは……」と書かれている部分をすべて「私は……」と言いなおしても支障がないとさえ言えそうである。純粋に

3人称で書かれているのはごく少部分で、しかもそのほとんどがミセス・デアに関するものである。逆に3人称で書けたはずのものが2通の長い手紙（1通はミセス・デアの、もう1通はモイラの）となってはさまっている。3人称とはいいながらこの小説は自分で自分を分析したり説明したり語ったりすることのできない「少し粗野で狂信的な」青年の目に映ったままの世界を描いている。ジュリアン・グリーン自身がその青年の目を通して見ているのである。そして読者をもその青年の目を通して見させている。ジョゼフの心理についての説明は何もない。作者の言葉通り、「この本は劇に向いている」（1950年1月10日の『日記』）。われわれは観客として、舞台の上の人物の行動のみを目で追っている。観客にはその人物の運命が分るが、舞台の上の人物には自分の運命は分らない。運命は、それを理解しないものにとってのみ運命なのだから。1人称の影をひきずったままの3人称という手法は、結果として物語に緊迫感を与えるのに役立った。そしてこの効果にジュリアン・グリーンが満足していることが前記1月10日の『日記』で見てとれる。

### 3.

ジョゼフ・デイ（Joseph Day）という18才の青年が、大学に入学するために、生れてはじめて故郷の町を離れて、大学のある町にやってくるところからこの物語は始まる。時は1920年の秋の初めである<sup>6)</sup>。大学の名は明らかにされていないが、これがジュリアン・グリーンの留学したヴァージニア大学であることは、かれの自伝と較べてみれば歴然としている。ジュリアン・グリーンは1919年9月、パリを発ってアメリカへ渡り、ヴァージニア大学に入学する。アメリカ在住の叔父（母方の）が学資を出してくれることになったのである。それから2年半のあいだ、この大学のあるシャーロックヴィルで過ごすことになる。かれ自身の強い希望からというわ

けでもなく、大学生活が楽しかったとも言い切れないものがあったが、アメリカ南部での生活がジュリアン・グリーンの文学風土の形成に決定的な影響を与えたことは否定できない。かれの処女作『モン・シネール (Mont-Cinère)』は、1919年のクリスマスの休暇に訪れた親戚の領有地が舞台になっている。『モイラ』の物語は大学と、それを取りまく町の中だけで進行する。『モイラ』の事件そのものはジュリアン・グリーンの実験ではないが、その中の登場人物たちのディテール、風物、雰囲気は、1920年ごろのヴァージニア大学そのもの、アメリカ南部そのものである。そして主人公ジョゼフ・デイの人間像の、もっとも本質的な部分は当時のジュリアン・グリーンそのものである。そのことをかれは別に隠そうとも思わない。「(この小説が) 私自身の物語の置き換えであることをどうして認めないわけにゆこうか? ……いわば偽名を用いるように、私は一人のプロテスタントを舞台にのせたのだ……」(1949年5月1日の『日記』)。

ジョゼフ・デイは紹介の手紙を持って、大学町のミセス・デア (Mrs. Dare) の下宿を訪ねる。このミセス・デアという中年の女が、ジョゼフにとって未知の世界の先触れとなる人物である。実際はミスなのだが、かなりな年齢になっているのと、モイラという混血の娘を養女としているために、まわりの人びとはミセスと呼んでいる。彼女は化粧と煙草とで、ジョゼフを驚かす。かれの故郷の町で化粧をしたり煙草をくわえたりするのはごく特殊な女にかぎられていた。ジョゼフを2階の部屋に案内した女主人は、寝台の上に視線を投げると、「おや、モイラが煙草入れを忘れていった」と言いながら、金属製のケースをパチンと開いて煙草をくわえ、「マッチをお持ちにならない?」と訊いてジョゼフの顔を赧くさせる。観客であるわれわれはここでモイラの名に耳をそばだてるが、舞台の上のジョゼフはもちろん気付かない。モイラが煙草と寝台 (奇妙な具合に斜めむきになっている) とで示されていることは注目する必要がある。煙草はジョゼフにとっては墮落したものの徴し、神に見棄てられたものの徴しで

ある。モイラは死の晩に煙草入れを忘れてきたことを悔むであろう。モイラの寝台はジョゼフにとってモイラそのもの、かれの欲望そのものとなる。そして最後にモイラはジョゼフの寝台のなかで押し殺される。

ジョゼフに故郷はどこかとたずね、隣の州にあるその小さな町の名を聞くと、ミセス・デアは「ああ、あの丘の間に<sup>あい</sup>ある町ね……」とうなずいて、ちょっと微笑する。この大学町の人びとは、その小さな町の名を聞くとみな同じ反応を示し、訳知り顔にうなずき合う。そして彼女は「あなたがあそこの丘の間にある町で、どんなことを教わったのかわたしは知らないけど、此所ではたとえ覚えなくちゃならないことがあるでしょうよ」と言ってまたも青年の顔を赧くさせておいてから、けたたましい笑い声を立てながら出てゆくのである。これは傲然たる輕蔑をこめてなされる肉の誘惑であり、同時にジョゼフの運命についてなされる第一の予言である。これらすべてはミセス・デアが来たるべきモイラの「予兆」としての役割を担っていることを示している。

ジョゼフの部屋にミセス・デアが入ってきて会話をかわす場面がもう一回出てくる。モイラが突然帰ってくることになったために、もともとモイラのものだった部屋の明け渡しを掛け合いにくるのである。この時もミセス・デアは煙草をくわえ、さらにあらわな誘惑の媚態を示す。そしてひるむジョゼフを前にしてひきつけるように笑い、廊下に出てからもくりかえし笑い声を立てる。ミセス・デアの登場するこの2つの場面は酷似している。このような「場面のくりかえし」はこの作品の特徴の一つで、いろいろな場面で指摘できる。たとえばジョゼフがはじめてモイラに会う場面では、その会話も、その侮蔑をこめた誘惑も、別れしなにジョゼフの背中に浴びせる「またね、赤ちゃん」という言葉も、ミセス・デアの場合と全く同型である。

#### 4.

ミセス・デアの下宿でのジョゼフの生活は、隣室に集まる学生たちのみだらな談笑に悩まされることから始まる。かれらの話題はすべて、大学町に新しく開店したいかがわしい酒場での遊興のことばかりである。ジョゼフはそのけがらわしい（らしい）話を恐れ、そして憤激する。隣室のひそひそ話を黙らせるためにドアに向かって椅子を投げつけるほどのジョゼフなのである。そのくせ性について全く無知、無経験なかれは、学生たちの話題をほんとうには理解していない。ただそれが悪の喜びであることをかれの肉体だけが感じとる。夜中まで続くそのささやき、しのび笑いは、耳をふさいでもきこえてくる。聞くまいとすることは実は聞こうとすることと同じことなのだ。拒斥と誘引が表裏一体となる。もしかれらの一人でもジョゼフの部屋に入ってきてそのような話を始めたら、ジョゼフは容赦なくかれを叩き出したであろう。事実、革ベルトで叩きのめされて半殺しの目に会うものもでてくる。しかし隣室とは壁によって隔てられている。この壁は2つの世界を分ける障碍でもあり、結びつける通路でもある。この壁があるためにジョゼフは、みずからの欲望（わいせつな話を聞くという、みずからに認めない欲望）と戦いながらも、ひそかにかれらと結びつくことができる、結びつくことを強制される。窒息性のガスが壁を通してジョゼフの部屋に入り込み、あらゆる隅から酸素を追い出してゆく。それはデモン（魔）のように捉えどころがなく、そして強力である。デモンは真空を忌むのである。

猥談にふけるこの学生たちは、ジョゼフと同じ下宿に住むものもあり、食事だけの契約で階下の食堂に集まってくるものもある。この小説の舞台は大学とその周辺の町に限られており、本の表題となっているモイラの登場する場面は、のちに述べるようにごく少ないから、作品の大部分を占め



るのがこれら学友たちとの関係であることは当然である。かれらの多くはただ舞台の奥を通り過ぎる影にすぎないが、そのうちの数名はジョゼフの運命に深く係わる。

ジョゼフの行路をまず横切るのがサイモン (Simon Demùth) である。「北部」出身の人間であることを鼻にかけ (南部のこの町では、これが一つの優越感となる)、画家としての才能があると己惚れているおしゃべりな学生で、ジョゼフの到着の直後からそばにやってきてなれなれしい親しみを示す。悪意のある人間ではないが、ただ一つこのサイモンが犯した過ちがあるとすれば、それはジョゼフを真剣に愛してしまったことである。単なる友情としてではなく *homosexualité* としての愛である。ジョゼフがそのような愛に気付くはずもなく、うるさくつきまとうサイモンをつねに撥ねつける。軌道のかみ合わない二人の間に生じた誤解 (たとえばマグノリアの花を贈るとか、ジョゼフの肖像を映画俳優のように画いたとかいう、つまらない事件) から憤激したジョゼフはサイモンを文字どおり震えあがらせる。サイモンは間もなく大学生活を放棄し、故郷に帰って自殺してしまうが、かれは最後にジョゼフに向かって、「君には何にも分っていないんだ。……君だっていつかは苦しむんだ。苦しむってことがどんなことか、きっと君にも分るだろうよ!」と、力をふりしぼって言う。これがジョゼフの運命についての予言の一つであることは言うまでもない。しかしその死を知らされても、ジョゼフはサイモンの苦悩を推測することすらできない。この小説にはジョゼフに殺された人物が2人いるわけである、すなわちサイモンとモイラと。ジョゼフの行路を横切ったものは、何らかの程度でかれに焼かれずにはいない。学友たちがかれを「みなごろしの天使」と陰で呼ぶのは当っている。

マック・アリスター (Frank Mac Allister) はみだらな話にふける学生たちのなかでも際立って不遜な男で、ジョゼフの部屋に入ってきて、ジョゼフの読んでいた聖書を冒瀆して怒りを買ひ、ジョゼフの寝台の上でいか

がわしい身振りをしてみせたために、ジョゼフに革のベルトで打たれ、半殺しの目に会う。

キリグルー (Edmond Killigrew) も隣室の猥談組の一員である。ダーク・グリーンの上衣にだぶだぶの半ズボン、その下にまたダーク・グリーンの靴下をのぞかせ、べっ甲縁の眼鏡をかけ、金のシガレット・ケースから緑色の長い両切煙草をとり出して吸う（ここでも煙草が象徴的に扱われている）男だが、ラテン語の復習教師をしており、マック・アリスターとはちがってジョゼフと真剣に話し合うことを望んでいる。かれもまた最初はジョゼフの激しい拒絶ないし憤激をこうむり、『ロメオとジュリエット』の中の猥せつな個所を教示したばかりに、ジョゼフからその本を2つに引き裂いて床にたたきつけるほどの怒りを買うが、それにもめげずにジョゼフのもとにきて、モイラを中心として学生たちのあいだに計画されているジョゼフ誘惑の陰謀を忠告するのは、かれのうちにジョゼフに対する好意（あるいは好意以上のもの）があったからである。かれはジョゼフとの会話のなかで、「僕等の一人一人の中に、獣がいる」ことを説く。「——……学生たちは女と酒のことしか考えない、で君は……—僕は違う！とジョゼフは腕をといて叫んだ。——君だってそうなのさ、とキリグルーは優しく言った。君だって連中と同じですよ。……ジョゼフはあまり唐突に立ち上ったので、掛けていた椅子を引繰り返してしまった。」キリグルーの忠告を、ジョゼフはモイラがかれの部屋に侵入してきた晩に思い出すであろう。マック・アリスターとキリグルー、特に後者はジョゼフに「負（マイナス）の価値」を示すものとして現れるのである。

## 5.

以上の学生たちに較べればプレーロー (Bruce Praileau) の存在ははるかに重要な意味を持つ。ジュリアン・グリーンは「モイラ。ジョゼフとプ

レーローの物語、この本の真の主題」(『日記』1950年3月24日)と言っているが、その意味を十分に理解するには、自伝 *Terre lointaine* に描かれているジュリアン・グリーンのヴァージニア大学時代の学友マーク(Mark) に対する愛を念頭に置かなければ無理なように思われる。それを念頭にして読めば、作者がこのプレーローという人物を熱意をこめて創造していることが分る。

ジョゼフはミセス・デアの食堂での最初の夕食の卓でプレーロー(食事のみを契約している)に会うが、二人は一言も言葉を交わさず、顔をあげて目を見合うこともできないのに、激しくぶつかり合い、いわばお互いにはじき飛ばされる。これがこの二人の美貌の青年のあいだに一瞬にして噴きあがった嵐のような愛の発端なのだが、ジョゼフはその意味をつかんでいない。ジョゼフの目に映るプレーローは、「南部」を代表する名家の出の、没落の淵に立ちながらなお誇りにみちた、「頭のとっぺんから足の爪先まで傲慢」な青年である。その傲慢な(とジョゼフには思われる)態度を思い出すだけでも、ジョゼフは血が逆流するのを感じず。そして自分の赤毛をからかったのがプレーローであると誤解して、かれに果し合いを申し込みに出かけてゆく。ジョゼフがプレーローの帰りを待ちながら、かれの宿舎(大学構内にある特権的な寄宿舍)の前の芝生に寝そべって、闇の中にじっとしている場面は、ジュリアン・グリーンとマークとのあいだに起った場面そのままであることを考えれば、この2人が大学構内の暗い池のほとりで繰りひろげる取組み合いの喧嘩は、作者が特に強い感慨をもって描きあげたものであることは容易に察しがつく。ジョゼフがプレーローの体に馬乗りになった時に、ジョゼフはみずからそれと気付かずに、官能の最高の喜びの瞬間にあったのだ。そしてその瞬間にかれの両手はプレーローの首のまわりに延びる。プレーローは「よせ、絞首刑だぞ!」と叫んで、ジョゼフをはねとばして起き上る。プレーローは殺されなかったが、この喧嘩はモイラ殺害の予兆となるものである。ジョゼフとプレーローの

関係は、そのままジョゼフとモイラの関係に移し変えられている。いずれも傲慢で侮蔑的な態度に始まり、最後に殺害、ないし殺害未遂に終る。愛するものを、愛の最高の喜びの瞬間に殺すというテーマである。作者はヴァージニア大学の学友マークをプレーローに重ね合わせて書き進めつつ、この小説を「ジョゼフとプレーローの物語にしたかった」のだ。かれが「これはジョゼフとプレーローの物語だ」と言った真の意味はそこにある。しかしこの時期のジュリアン・グリーンは *homosexualité* を正面から採りあげる決心がつかず<sup>9)</sup>、プレーローをモイラの中に移したのである。さきに引用した『日記』に「偽名を用いるように……」とあったのは、たんにジュリアン・グリーン自身をプロテスタントに仕立てたばかりでなく、マークをプレーローに、プレーローをモイラに仕立てたことをも意味していると言えるだろう。

ジョゼフ自身は殆ど気付いていなかったが、プレーローの方はジョゼフに対する愛をみずから認めていたに違いない。ミセス・デアの食堂にただ一回現れただけで、その後顔を見せなくなったのは、自分の感情の昂りを抑えることができなかったからであろう。モイラが失踪した翌日、まっさきにジョゼフを大学構内でつかまえて、彼女がどこに行ったか教えてくれと頼んだプレーローは、ジョゼフとモイラの上に何が起ったのか完全に見透していた。池のほとりでの喧嘩のあと、別れしなにかれはジョゼフに、「……君の心の中には人殺しがいるんだ」と予言していたのである。かれはジョゼフに外国へ逃亡するための手助けをしようとまで申し出るが、ジョゼフはそれを断り、あえて縛につく途を選ぶが、この選択こそジョゼフが全き自覚のもとに生き始める第一歩となる。

## 6.

主人公ジョゼフは別として、登場する場面の量から言えばデーヴィド

(David Laird) が圧倒的に多い。一見、この小説はジョゼフとデーヴィドの物語のように思われる。図書室の書棚のまえで聖書を探しあぐねていたジョゼフに親切な声をかけて、やがて非常に親しい仲となるこの牧師志望の青年は、年齢はジョゼフと同じ 18 才だが、すでに一人前の牧師になってしまったように平静で思慮に長け、ジョゼフに対し信仰の指導者として接する。そして心底から、この荒っぽいのが傷つきやすく純な魂に愛情を抱いている。2 人は熱烈な信仰で結ばれ、神の選びが自分たちの上にあることを感じ、この汚れた大学町に信仰の炎を燃え上らせたいと勇み立っている。しかしこの 2 人の信仰は実は根本的に異質なものである。ジョゼフの言葉を借りれば、「原始時代の宗教」と「よく飼い馴らされた宗教、白い法衣と手入れの行き届いた爪を持った宗教」との差である。ジョゼフもまたデーヴィドを愛し、その助言を常に必要とし、何度も「この男が僕を救ってくれたのだ」と感謝するくせに、「一方で烈しい苛立ちを覚え」、「時々デーヴィドが憎いと思う時がある」のは、この対極的な 2 種類の宗教をジョゼフが頭でなく、体で感じているからである。ジョゼフの信仰からみれば、デーヴィドの婚約すら許しがたい罪——淫行に他ならないことになる。この極端なまでの純粹さにデーヴィドは恐れを抱く。「僕は時々君のことが心配になるんだ。きっと君を愛しているからだね。君の中にある善なるものが、何かしら度外れたものと境を接しているような気がするんだがね。」ジョゼフの魂の指導者として当然気付かなければならないことだ。ただかれは気付いただけで、その度外れたものを阻止する力を全く持たなかった。

デーヴィドの人物像はこの作品に登場する人物の中でもっとも生彩に欠けると言われている。ジョゼフのピューリタニズムに対立する日常的な信仰を描くために創り出された人物だからであろう。いわば狂言回しの役を演じているのである。しかしこのデーヴィドとの対話によってジョゼフはおのれの信仰を再発見し、確かめてゆく。そしてその行き着く先は、デー

ヴィドの考えも及ばない遙かな地点となる。ジョゼフをミセス・デアの下宿から引き離し、自分と同じミセス・ファーガスン (Mrs. Ferguson) の下宿に移らせたデーヴィドは、ジョゼフを案内して庭の道具小舎を見せ、小堀の向うにひろがる錆色の荒地を示す。やがてジョゼフはその道具小舎から鋤を取り出し、小堀を乗り越え、荒地のただ中にモイラの屍を埋めるであろう。モイラ殺害の道具立てを整え、ジョゼフの破滅の軌道を敷いてやるのがデーヴィドなのである。もっとも善意に燃えた親友が「原始時代の宗教」を持つ青年の手をとって、一步一步破局へ向けて案内してゆく。ただ最後に、惨劇が行われてジョゼフがもう引き返すことのできない地点へ登りつめたとき、デーヴィドははじめて自己の凡俗の境地を認めたように、「君という人が僕よりずっとすぐれていることを……僕はこれから先も、たかが一介の牧師にすぎないだろう。しかし君は……」と、片手をジョゼフの胸に置いて言うのである。デーヴィドの部屋の描写にはランプがしきりに使われている。ランプはつねに秩序、つつましい快適、安全、純潔、平和な魂の象徴である。<sup>10)</sup> ジョゼフはデーヴィドの部屋に足を踏み入れて、ランプの光に照らし出された室内の光景を目にすると、途端に不安を忘れ、気持が静まってくるのを感じず。ランプは指導教官タック氏 (M. Tuck) の部屋でもジョゼフを迎える。数学の教授であるタック氏は肥った快活な男で、あまり深刻な宗教上の悩みなどは理解できないタイプのように見えるが、そのタック氏でさえ、ジョゼフとのわずかな会話から或る予感を抱かずにはいられない。「……いつか君がひどく馬鹿げたことを、馬鹿げたと言っても勿論青年にありがちのことだが、まあそういうことをしでかす羽目になったら、いつでも私のことを思い出しなさい。いつでも私に相談に来てくれれば助力してあげますからね」と、ランプのそばの脇掛椅子に腰をおろしているジョゼフに言う。

モイラがジョゼフの部屋に侵入してきた晩、彼女はジョゼフの取り付く島もない応待に困却し、かれからペンと便箋を借り、ランプの位置をずら

してもらって、その明るい光線の中で手紙を書きはじめる。それはジョゼフ誘惑の首尾を友人のセリナ (Céline) に報告するはずのものだったが、徐々に調子を変えてゆき、最後にはジョゼフへの愛の告白となる。そのあいだジョゼフは光りから少し離れた寝台の端に腰かけ、本を読もうと空しく努力する。光りの中のモイラが純化されてゆき、光りのそとのジョゼフはますます暗い情念にのめり込んでゆく。彼女がおそらく生涯ではじめての愛の文字を記し終え、ランプの光りの輪から抜けて部屋を出ようとする時に、ジョゼフの激情が解き放されるのである。

## 7.

モイラは捨て子である。ある冬の夜、新聞にくるまってヴェランダに置き去りにされていた赤んぼをミセス・デアが育てて養女としたのである。黒人の血が混っているために、ミセス・デアは娘に明るいところで人に爪を見せないようにいつも注意しなければならない。「お前は悪い性質をのこらず持っている」とミセス・デアを嘆かせるその娘は、18才のいま、キリグラーの言葉によれば、「あれこそローマ人がルーパと呼んだものですよ、牝狼、ね、いつでも飢えている獣」である。

ジョゼフの部屋はもともとモイラのものだったが、彼女は他の町の学校に入っていて、休暇にならなければ帰って来ないことになっている。彼女の名はミセス・デアの口を通して観客には早くから知らされるが、舞台上のジョゼフには知らされない。ジョゼフが部屋に案内された時に、銅製の寝台が「奇妙な具合に斜むきになって」いるのは、作者が注意深く挿入した伏線である。彼女の名がジョゼフの意識に入ってくるのは、この作品の後半 (第2部) に入ってからで、シーツ交換に来た黒人女中ジェマイマ (Jemima) の口から、この部屋が「モイラお嬢様」のものであることを教えられた時からである。その時モイラが寝台を「お部屋の真中に、ちょっ

とはす向きに」置く癖のあることも聞かされる。それ以後ジョゼフにとって、いまだ見ぬモイラは寝台の姿をとって現れる。それゆえかれは、「僕は、この寝台には、もう決して寝ないから」という唐突な決心をするかと思うと、就寝前の「主の祈り」を称えている最中にふと気が変って、寝台をはすかいに置けるように部屋の中央にまで引張り出したりする。ミセス・ファーガソンの下宿に移った夜は、「自らの肉の過ちを償うため」(ただし現実の行為としては過ちなど何一つなかったのだが)、一夜を堅い木の床の上に横たわってすごそうとする。そしてモイラの殺害は、このミセス・ファーガソンの下宿の寝台の上で成就されることになる。

ジェマイマの口からモイラの名が出たすぐ後、ミセス・デアはジョゼフに部屋の空け渡しを要請する。モイラが学校を退学して帰ってくることになったのである。はじめジョゼフはその要請を拒絶するが、結局はデーヴィドのいる下宿に移ることを——むしろ逃げ込むことを——承諾する。そしてジョゼフが、忘れて来た毛糸のジャケツを取りに戻った時に、かれははじめてモイラを見る。それも階段の下からまず彼女の声を聞き、やがて階段の手摺に寄りかかって下をのぞく彼女を見るのである。モイラとの最初の出会いの場面が、ミセス・デアとの場面の「くりかえし」であることは先に述べた。ジョゼフはモイラが床の上に投げてよこしたジャケツを拾い上げるのだが、最後の晩にも、故意か偶然かモイラは鍵を床の上に落としてジョゼフに拾わせる。これも「くりかえし」である。

モイラが姿を現わすのは、この作品の5分の3を過ぎたところである。観客はいわばじらされて待っている。その後も彼女はほとんど顔を見せず、ただ街頭で二度すれちがうだけで、次に姿を現わすのが最後の殺害の場面ということになる。つまりこの作品の前半でモイラは全く不在、後半でもほとんど不在なのである。この不在によって彼女はジョゼフを支配する。隣室の学生たちは壁の向う側に身を隠すことによって、そのひそひそ声でジョゼフの心を掻き乱し欲望をあおりたてたが、モイラはその不在



によって力を振う。現前するものは現前することによって限定されるが、不在なるものはいついかなる場所にも立ち現われうるからである。黒人女中ジェマイマの口からその名が出されるや否や、ただちにモイラはジョゼフの肩に飛び移る。ジェマイマが部屋から出てゆくと、ジョゼフはもう寝台から目を放せなくなる。

8.

ミセス・デアがジョゼフの故郷の町の名を聞いて、「ああ、あの丘の間にある町ね……」と言ったように、モイラもジョゼフに向かって、「そうなの！……（その他一切のことが説明できると言わんばかりに）丘の間にある町ね……」と言う。それは貧しさと、極端なピューリタン信仰によって知られている田舎町で、大学町の人びとに異和感——輕蔑の混じった、妙に窮屈な気持を抱かせる。ジョゼフは故郷にあって、「しばしば人が突然立ち上り、比類もない説得力を発揮して神の言葉を告げるのを見た。」かれはデーヴィドに、「子供の時分から、考えさせられることと云ったら、殆ど天国と地獄とのことだった」と言っている。だからカフェテリアでのアルバイト仲間の学生から、「お前は椅子の上にまたがって、おれたちに地獄の話でもしてくれるだろうよ」と冷やかされたその瞬間、ジョゼフが「神の選択が自分の上に落ちたと確信する」のは、少しも突飛なことではない。そのような町にあって、ジョゼフの父親はまた殊に烈しい気性の持ち主で、妻の貞操について旅人と喧嘩をし、そのために失明してしまう。

ジョゼフは故郷の町を思い出しながら、「火は僕の祖国だ」と言う。かれにとって「神は火」なのである。かれの故郷は火——緋色の町と言えら  
 であろう。ジョゼフは最後の晩に、手紙を書いているモイラを目の端に感  
 じながら、ふとゴールディ<sup>11)</sup>という女が故郷の町にいたことを思い出す。金  
 髪なのでそう呼ばれていたのだが、藥屋の息子が3ドルで彼女と悪いこと

をしたとかいう話もあった。ジョゼフにとってそれは神に見棄てられた人間の見本のようなものだった。ジョゼフはモイラの上にゴールドィを重ねて見るのだが、大学町はこのような神に見棄てられた人間で溢れていた。ゴールドィは、丘の間にある町にあって、神の飛び火のような緋色の文字Aを胸につけていたのである。

故郷の町からやって来たジョゼフにとって、大学町は黒一色の町である。デモンが窒息性のガスのように遍在し、酸素を奪う。かれの気持は、ある講義の最中に隣席に坐った学生がカトリックだと知った時、「この神に見棄てられた者と同じ空気を、自分も呼吸しているのだという考えが、不意に頭に浮んだ。すると彼は一種の恐怖と、熱のこもった関心とを、同時に感じた<sup>12)</sup>」という個所によく示されている。かれは大学町で出会うすべての「墮落した」人間に対し恐怖を感じる。かれの心性を説明するものは何よりもこの恐怖——自分自身もかれらと同じように「墮落」するのではないか、神に見棄てられたものとなるのではないかという、この恐怖<sup>13)</sup>である。この恐怖はかれの意識のなかでは、逆に宣教の熱意として現われる。すべて墮落した人間に出会えば——たとえば顔に化粧をし煙草をふかすミセス・デアを見れば、かれは「あの女は、僕によって救われるために、僕の道の上に現われたのだろう」と考える。それが自分の唯一の使命であると思う。そのために神の選びが、ある時は自分の上に落ちたと信じ、ある時は選びから外されたと疑い、気分の昂揚と落胆のあいだをめぐるしく往き来する。しかし恐怖に捉われたものはすでに敗北している。天成の牧師であるデーヴィドはこの恐怖と敗北とをこう翻訳する、「——どうか気を悪くしないでくれ給えね、ジョゼフ、僕をして言わしめれば君は……淫行のことを、君が淫行と呼ぶところのもののことを、あんまり考えすぎているのだ。君はそれを避ける、確かにね、しかし君は心の中でそれを考えているのだ。」「僕は、人が大嫌いなものについて考えるように、そのことを考えているだけだよ」とジョゼフは答えるが、そのあと小声

でこう付け加える、「でも僕は、考えずにはいられないのだ。」ジョゼフが考えまいとすればするほど考えずにはいられないもの、「淫行」そのもの、自分を神から見放されたものとする恐るべきデモン、それがモイラである。「神と僕との間には彼女がいるんだ、僕は彼女が嫌いなんだ、実際嫌いなんだ」とかれはデーヴィドに告白する。

しかしジョゼフの自然のままの若さは、緋一色でもなく、黒一色でもない。アメリカ南部の大学町の多彩な美しさに、われにもあらずかれの心は開く。ミセス・デアに案内されてはじめて自分の部屋に足を踏み入れた時、「通りを縁どっている楓の並木を、暗い紫色から赤や黄銅色にまで、烈しい色彩で移っている」アメリカの秋を、窓から見下して思わず「素晴らしい」と眩かすにはいられないジョゼフなのである。ジュリアン・グリーンは風景描写にすぐれた作家で、殊にかれの父母の故郷である「南部」の風物と歴史は、かれの心情に忘れられぬ感動を刻み込んだ。ジョゼフの目に映る大学の風景は、作者自身の甘美な思い出の響きを伝えている。ジュリアン・グリーン自身は、パリで生まれ、パリで育った正真のパリ人士で、この首都に対する愛情をかれは自伝にも日記にも繰り返して記している。しかしかれの小説に関する限り、アメリカ南部がかれの故郷であると言ってよい。それは父母の——特に母の思い出につながる土地であったからだが、さらにつきつめて言えば、そこには土があったからだ。パリの舗石はついにこの土の力を持ち得なかった。ジュリアン・グリーンの心の響きは、とりもなおさずジョゼフのものである。かれの心を占領する恐怖にもかかわらず、湧きあがって来る青春の息吹きがこの小説の魅力の一つになっている。しかしジョゼフはこの青春の多彩を認めず、黒い恐怖にかられて惨劇へと向かう。

モイラの殺害は、2日間にわたって降り続いた雪の白一色の中で行われる。ジョゼフがもっとも烈しく信仰に燃え、神の選びが自分の上にあることを確信し、「僕は召されたのだ、デーヴィド。君と同じように、キリス

トに召されたのだ」と勝ち誇ったように言った直後に、細かい雪片が暗い空から音もなく落ちはじめ。それを見ると戦慄がジョゼフの肩を走り、雪は嫌いだと口を衝いて出そうになる。そして「火は僕の祖国だ」と叫ぶのである。夜に入ってますます降り積ってゆく雪の中を、モイラはジョゼフの部屋に現れる。この白一色の世界の中で、すべての罪、すべての惨劇は行われ、ジョゼフはモイラの屍を雪の曠野に埋める。雪がこの犯罪の唯一の目撃証人となる。その翌朝、ジョゼフが教室に入った時に雪はやむが、それがかれには信じられない驚くべきことに思われ、「雪がやんだ」と繰り返し呟く。そして町の人たちがみなこの初雪に、そして「一点の汚れもとどめていない純潔な雪」に童心を呼びさましてはしゃいでいる中を、ジョゼフはひとり夢遊病者のようにさまようのである。

## 9.

ジョゼフの行き着く地点を最後まで予言できなかったのはジョゼフひとりだった。この小説に登場するその他の人物はすべてそれを予言している。ジョゼフを衝立の前に立たせて、みなが手品師のように短剣を投げつけているようなものだ。短剣はジョゼフの体すれすれに刺さり、衝立にはジョゼフの輪郭を画いた短剣の線が浮び上がる。ただジョゼフはうしろ向きに立たされて、身のまわりに突き刺さる短剣を見ない。執筆前に作者がこの物語の「細部にいたるまで」「端から端まで」見てしまったために、ジョゼフは動けなくなった。

ジョゼフとともに行き着く地点まで一直線に進んだのはモイラである。ジョゼフが全く盲目だったのに較べ、モイラは迷わずにまっすぐ前を見て歩いているような印象を受ける。実際は学生たちの悪ふざけに乗って出かけるのだが、誰か他のものに「遣わされて」、自分の使命を果しにゆくように見える。ジョゼフはこの牝狼、このデモンと合体し、合体することに

よってデモンを殺す。殺されたデモンはジョゼフの自己——と言うよりも、自己の中の自己に非ざるもの——<sup>14)</sup>だった。ジョゼフの顔は雪よりも白い。野山を埋め尽した白一色の中にただ一点、燃えるようなジョゼフの赤毛が、外国逃亡の途を捨て、自分の足跡をたどって引き返してくる。

注 1) Oeuvres complètes, t. IV, Pléiade.

2) 原文ではイタリック体になっている。

3) 現在残されている草稿としては第7番目（決定稿の直前）のもの。

4) 第2次世界大戦中、かれはアメリカ合衆国にいた。

5) 原田武訳（『流域』2，青山社）

6) この年号は作品中のある場面に出てくる。

7) ジュリアン・グリーンがそうだった。

8) 喧嘩ではなかったが。

9) Le Malfaiteur の執筆は中断されたままだった。

10) 『日記』（1942年8月2日）によれば、壁いっぱいの書物、机の上のランプというのはジュリアン・グリーン自身の部屋の描写である。「私はテーブルの上に置かれたランプがなぜこれほど私のイマジネーションに働きかけるのか知らない……。」このことは、デーヴィッドが作者の一面を示すものであることを考えさせる。

11) 初稿の特色の一つは、故郷の町とゴールディとが、かなり細かく描かれていることである。

12) ジュリアン・グリーンは16才の時にプロテスタントからカトリックに改宗している。

13) ジュリアン・グリーンの作品には、作中人物が精神的危機の真只中で突然眠りに落ちる場面が異常に多い。『モイラ』の中だけでも少なくとも8回は起っている。眠りによって場面の転換が行われるので、小説の手法としては安易すぎるように思われるが、ジュリアン・グリーンの自伝を読むと、これはかれ自身の体験でもあるらしい。G. Bateson と M. Mead がバリ島で行った調査（1942年）によれば、そこには「タクト・プルス（恐怖の眠り）」と呼ばれる眠りがあって、人びとは恐怖感にとらわれると、突然眠気におそわれることがあるという（『しぐさの世界』野村雅一，NHKブックス）。

14) モイラ＝運命の女性（femme fatale）＝アニマ（anima）と置き換えることもできる。

『モイラ』からの引用文はすべて福永武彦訳（人文書院版『ジュリア

ン・グリーン全集』) による。